復刻版

トカラ諸島資料集案内

〔 ハシケ作業 ― やぎの積込み 〕

トカラ諸島資料集出版案内

ボンエ房

「十島村の地名と民俗」	昭和四二年刊	19cm×21cm	157頁	限定五三部	在庫無し	
「種子島遭難記―坂元新熊談」	四四年刊	B5判	29頁	七〇部	在庫無し	
「悪石島の地名」	四四年刊	B5判	28頁	七〇部	在庫無し	
「臥蛇島金銭入出帳」	四六年刊	B5判	268頁	二〇〇部	価一五〇〇円 送料一〇〇円	
「トカラの伝承」	四六年刊	B5判	50頁	初版二〇〇部 再版三〇〇部	価三〇〇円 送料八〇円	
「臥蛇島部落規定」	四七年刊	B5判	164頁	二〇〇部	価一〇〇円 送料一〇円	
「トカラの地名と民俗（上）」	四八年刊	B5判	148頁	三〇〇部	価一〇〇円 送料一〇円	
「トカラの地名と民俗（下）」	四八年刊	B5判	140頁	三〇〇部	価一〇〇円 送料一〇円	
「臥蛇島出仕事記録」	近刊予定					
「平島日誌―昭和四七年」	近刊予定					
「宝島民俗誌」	近刊予定					

「出版案内」によせて

宮本常一

稲垣尚友君（ボン工房代表）は私の親友です。

そのはじめは、南の海、南の島にあこがれて島を訪れる旅をしたのですが、そこに生き、その地の歴史を作ってきた人たちの姿に深く心をうたれ、そこに住む人たちの話を聞き、そこで生きるために必要とした記録類などをガリ版に切って前記のような書物を作りました。

これらの書物を読んでいると、島で生きてゆくためには、どれだけの知識、文字、金銭を必要としたであろうか、またその生活や文化を継承し向上させるということはどういうことなのか、ということをしみじみ考えさせてくれます。

このガリ版のシリーズはこれからもつづけて出版されると思います。志ある方々の支持を得て、稲垣君が日常生活の室さの中にその志を埋没させることなく、同時に過去の忘却の中へ追いやられようとする島人の歴史と生活を、われわれの文化として長く記憶にとどめるために、このシリーズの読者になっていただきたいと思います。たとえ読者にならずとも貴家または貴館の書架に所蔵されて、一人でも多くの読者をつくっていただきたく、ここにおねがい申しあげます。

（民俗学、武蔵野美術大学教授）

書評

▼「臥蛇島金銭入出帳」「臥蛇島部落規定」（稲垣尚友編）という二冊のがり版刷りの、まさしく辺境の暮らしの重みを感じさせる本が出された。「十島村誌・臥蛇島篇資料(一)(二)」とある。

まさしく辺境の暮らしの重み

『臥蛇島金銭入出帳』『臥蛇島部落規定』

さ四〇㌢のその木箱をあけてみた。中には、ネズミの糞と虫の死骸に包まれて、クズ同様に、各種の書類がクシャクシャになって押し詰められていた。しわを伸ばしてみると、歴代の総代選挙の開票結果や、鹿児島の鰹節問屋との取引文書等が見付かった。そして、箱の一番下に、入出金銭帳の"こ"が飛びちこっちに乱れた。島の人たちは、この"クズ"を見ながら、"こんなクサレはいらんが。どうせ、フロの焚きもんにすっとやから、良かとがあればお前にくるっで"という。私は、この書類にどんな意味があるのかは、いまだわからないでいたが、"捨てはならない！"という直感を頼りに、これらの"クズ"をウウ箱へ大箱一ご

稲垣氏は一九六九年にこれらの資料を島で入手し、この記録が永久に消されそうになっている島の状況を憂い、その古めかしい文字群を丁寧にガリ版に収めたのである。納屋でそれを見つけたときのことを「"そんなクサレ箱を何すっとか"と笑いながら開蓋を許可してくれた。私は、紙七〇㌢、横五〇㌢、深

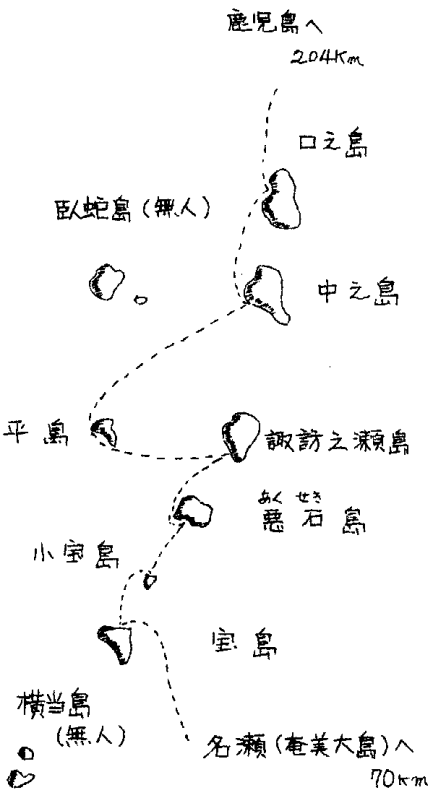
と、ありがたく貰い受けることにしたと書いている。

こうしてクズ同然として あった「臥蛇島人民惣代預り」という大正十二年十一月から昭和二八年までの記録が、金額と用途と用付けを明記して、一つの島の歴史の実在証明となった。昭和四十五年に全島あげて離村し無人の島と化したこの現実にあっては、一冊の「金銭入出帳」は、かつてこの島にまぎれもなく「人間らしい」「貧しい」「心の通い合った」生活があったことを教えてくれる。

▼「部落規定」もまた、その共同体をささえていくための最低線のモラルを必要としたことを示すよい材料である。

明治四十五年の「出仕事規約」から始まり、大正十四年の「臥蛇島婦人会節約申合規約」、昭和八年の「人民集会決議案」、十六年の「国民召集者に対し部落扶助金記録」、四十五年の「移住に対する助成嘆願書」その他の、法律用語で書かれたものや肉声による訴状などが、島の生活を証言してくれる。

（「信濃毎日新聞」「長崎新聞」「熊本日々新聞」に掲載された書評記事より転載した。）



島々の位置

昭和46年11月8日 月曜日

日本読書新聞

稲垣尚友著 臥蛇島金銭入出帳

近年、離島における過疎現象が大きな社会問題となっている。鹿児島県の南に点々と横たわるトカラ列島の臥蛇島にもその波が押寄せ、四五年全員離村し無人島となってしまった。島民が世帯道具や家畜を運ぶそのときの様子はテレビでも報道され、まだ記憶に新しい人もいるかと思う。それまでは十戸ほどの、交通の不便なこの孤島は一般からは耳遠い存在であった。それが、無人島になるや、一躍世間の注目を浴びることになったのである。まことに皮肉な現象といわねばならない。

それから一年有余、この無人島も忘れかけようとしているが、こうしたなかにあって、一見、変哲もないようにみえながらもその奥底に潜む複雑な人間模様に眠をみやり、島の歴史を発掘しつづけてきた研究者のいる。

克明をきわめる記載

いたものを筆写したもので、体裁もさることながら、記載内容も大正、昭和にかけての島の毎日の金銭入出の状況を実に二六三頁にわたって忠実に書写しただけのものだからである。

その記載は克明をきわめる。たとえば、(昭和六年)五月二十二日、一、金六十五銭、焼酎五合代、コーカシラ畑名ー甘藷植ノトキ青年へ進呈ス、というふうに書写したものである。けれど、書写しただけといっても随所に著者の注釈がはいるが、かほどの分量を刊行するということは並のことではできまい。それには臥蛇島に対する愛着があってはじめてできることと思えるし、だからこそ読みすむうちに鬼気迫るものが感じられるのである。

ところで、明治一七年に

こともまた確かである。本書の著者である稲垣尚友氏もその数少ない研究者の一人であろう。

本書は「十島村誌」八編へ予定ーのうちの第一編の一部をなす。総じて本書は地味な本といえる。元総代の家の納屋にうずくまって

白野夏雲が「七島問答」を著し、トカラ列島の地理、風俗、生業などを報告しているが、そのなかで臥蛇島にも触れている。それによると、当時の臥蛇島はかつおぶしを主生産物とした漁業の島であり、何と七島第一の収入を得ていたことが分る。だが、明治の末頃より本土の動力カツオ漁船がこの近海に進出した結果、小舟によりもっぱら擬似餌を引きまわして行なう島民のカツオ漁業は圧迫されていった。それが原因で臥蛇島の経済は衰退していったのである。

本書に記載されている事項はそれ以後の時代のことであるけれども、かような歴史的背景を知ったうえで本書を読むとまた格別な味わいがある。一離島の金銭入出の状況を詳細に筆写しただけのものとしても、それを通して島の経済生活の一端が伺えるのである。

（山路勝彦・東京都立大学大学院生・社会人類学専攻）

『トカラの伝承』を読んで

かつて柳田国男は「つまり、学問は同情であるし」といいました。彼によってその基礎を築いた民俗学の根本的目標は「如何に将来の日本人の幸福を導くことができるかし」ということであり、そのために民衆の生活を知ることから始まりました。しかし、その目的は忘却されがちでありますが。より科学的に研究するという名目の下に、より客観的な研究、換言すれば、民俗を一つの客観的事物として観察しようとしてきました。そこではその民俗を作り出し維持してきた人々と調査者との間に明確な一線が引かれ、おたがいの交流のないものとなります。成程私は多くの人から村人と仲良くする技術を学びました。それは大切なことです。しかし、それはあくまで自分の調査を促進するための一つの技術でしかありません。調査される側に立って考えるということではないのです。

話者との魂の触れ合い

著者は民俗学者ではありません。だから、これを民俗学の資料としてみるなら、明らかに不備な点が多いことを指摘できます。しかし、

著者が島の人と長く生活し、島の生活を通してモノを見、それを島の人の話しを借りて訴える、それら人々の苦しみや思想はたしかな実感として我々の胸を打つものがあります。

また、これらの話のなかから民俗学的資料として役立つものもありますが、それらは親しく村人と接していなければ聞くことのできぬものであります。

「種子島遭難記」における、その当時の交通範囲、あるいは島外の生活に対する理解の問題、「ミコの千里眼」における信仰、そしてその他で語られる島の事件、それに対処した島の人々の考えや行動等、興味が湧きます。

ただ、民俗学を専攻する私からいわせてもらうならば、著者は"型"の強がが不足していると"いうことです。一定の方法をもって調査できておりませんし、記述の内容もやゝ不精確です。そういうと、型の訓練は専門家のなすべきものであり、素人に必要ないと反論されるかも知れません。

でも、著者が島の人々の生活を正しく把握するには、その一つの方法として"型の訓練"は要求されます。各地において鋭い観察と分析を行ないその成果に接することはありますが、それらの大部分の人が所謂"型"をもっていないために、それらの総合的理解を欠くことが多いのです。それを克服し、更に高められたものにしていくためには型の訓練は必要でしょう。

しかし、私はこの著者のもつ意味は決して小さいものとは思いません。なぜなら、ここでは調査者対被調査者という形でなされた報告ではなく、根底に、その両者、つまり我々という態度が示されているからです。民俗学が失なった精神、つまり魂に触れ合う対話から出発するという、を見出すことができます。かゝる意味においても、我々は、少なくとも私は、多くのことを学ぶことができました。最後に、著者が更に豊かな成果をあげられんことを期待してやみません。

（安田宗生・東京教育大学院・民俗学専攻）

「トカラの地名と民俗　上巻」

十島村内にある七つの有人島と三つの無人島の字名、および、小字名一八〇〇例をのせる。そのほか、各島の全島地図と部落内地図一八葉を折込んである。

以下に目次を追って紹介しておく。

序章　十島村の概況

(イ)村名　(ロ)位置・交通　(ハ)人口　(ニ)地勢と面積　(ホ)気候　(ヘ)産業　(ト)文化施設

十島村の社会生活

(一)原始共同体の崩壊　(イ)共同体の名称　(ロ)構成員　(ハ)職制　(ニ)共同作業　(ホ)共同体意識

(二)一島共有地―中之島の場合―　(イ)問題点　(ロ)〝共有地〟の内容　(ハ)地組改正の実際　(ニ)官有地と共有地　(ホ)村制施行後村当局との対立抗争　(ヘ)絶末

内容紹介

本章　十島村の地名

(一)字名と小字名　(イ)口之島　(ロ)中之島　(ハ)臥蛇島（含、小臥蛇）　(ニ)平島　(ホ)諏訪之瀬島　(ヘ)悪石島　(ト)小宝島　(チ)宝島　(リ)横当島

「トカラの地名と民俗　下巻」

十島村の地名

(二)十島村の方言音韻

(三)地名の意味　(イ)カワとコーラ　(ロ)タオ（ドー）　ハイワヤ（イワ）　(ニ)崎と鼻　(ホ)ヘタとオキ　(ヘ)マセ　(ト)ツズ

(ヶ)尾根の名称
(リ)フルサト（古里）
(又)スバタケ（潮見所）
(ル)ゲロー
(ヲ)トマリ（泊）
(ワ)コモリ
(カ)サコ（サク）
(ヨ)平（テーラ、ヒラ）
(タ)尻（シイ）
(レ)グシキ
(ソ)その他
(四)地名と伝承（一四〇例）

十島村の民俗
(一)年中行事（三例）
(二)信仰（八例）
(三)天然現象と日常生活
(イ)時刻と潮時
(ロ)時となえ
(ハ)風位
(四)古謡（一一例）
(五)通過儀礼
(六)伝説・昔話（七例）

附録
「参考資料」
「地組改正調理帳序」「地所立木戻申請」、他八例

「トカラの伝承」

島々の古老五人が語る口伝である。本文は一一話よりなり、そのいずれもが島々の方言で語られている。内容はさまざまであるが、ひとつだけ共通点がある。それは、自らの体験を通して語っていることである。

(一)種子島遭難記

坂元新熊（しんぐま）（悪石島）

盆も過ぎた二三日の晩、ホラ貝の音が部落に鳴りひびいた。島のイサバ（帆船）が大島から帰ってきたのである。青年達は、みんな浜に出て、船を引揚げる準備にかかった。ところが、折悪く、強風が吹き出し、高波まで出てきた。なかなか、イサバを陸に引き寄せられない。このままでは大事になるということで、新熊青年ら一二名は決死の覚悟で、高波の中へ手舟を漕ぎ出して沖のイサバへ向った・・・・・

乗客もろともニハ名は、風と潮に押し流され、東シナ海のド真中を北へ北へと漂い流されていった。

(三)(二)室流行りもの世昔は、なえへ地震ーがようあった。なえがしたら、ついま何時へなんどきーやから、こは、何のなえレて言うた。

永田常彦（中之島）
永田清彦（中之島）

つ五の雨に、四よつ日照り、六むつ、八やつ七ちへ八つ時ーならばいつも大風、九は病いレて言いよった。

なえも天気に影響すっですなあ。ゆぶってから一週間ばっかすれば、天気が時化ってですなあ。（中略）

昔の人は、いろんな研究をしよったろう。今は、もう、機械やいろんな道具がでけて、そうする人はする人で立っとうから、それで、皆んなが研究せんわけです。もう、昔は、吾がで実際研究してみうにやあ、いかんわけです。今んとは、外国、アメリカ、ドイツ、イギリスの、あれじゃろう、流行りもんじゃろう。

内容紹介

人カラの伝承

(四)一島共有地を守る　永田常彦

昭和六年、時の中之島区長であった常彦翁が、県および村を相手に、入会地へ一島共有地ーの所有权を主張して激しく斗った話しである。

(五)霜月祭り　永田常彦

(六)大荒神のたたり　肥後伊勢熊（鹿島）

(七)ミコの千里眼　永田常彦

島のミコが、文字通り、千里の先を見抜いた話しである。

(八)ネズミ騒動　永田常彦

大正二年は"ネズミ年"といわれている。ネズミが島内に大発生し、畑の作物はおろか、赤子までかじられるすさまじさであった。

(九)カッパに弁当を食われる　伊勢熊

(十)明治三八年の土砂崩れ　高岑左仁門（口之島）

(十一)三〇度線の密貿易

資料購読ご希望の節は
左記へお申込みください。

ボン工房
〒106 港区六本木[illegible]
☎ (03)四〇四一[illegible]
(03)四二四一[illegible]
振替 東京一七[illegible]